



実習報告会で後輩の質問に答える生徒

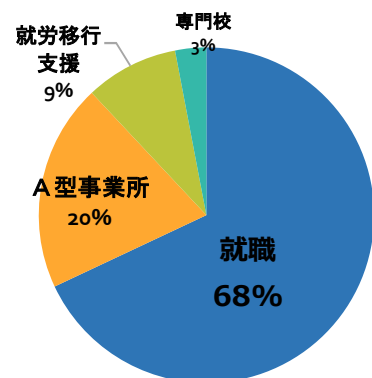
「つなぐ」教育 の実践

熊本県立
ひのくに高等支援学校

本校は軽度知的障がいを持つ生徒の「社会自立」「職業自立」をめざし設立されました。生徒の進路を保障することは、我々の使命であると自覚し、日々の活動に取り組んでいます。

データから見たひのくに進路

右のグラフは、昨年度の進路状況を示したのですが、就職率は68%となっています。全国の特別支援学校（高等部）卒業生の就職率が32%、熊本県が20%であることを考えると、非常に高い数字になっています。また、福祉的な支援を受けながら「雇用関係」を結んで働くA型事業所を含めると、88%の生徒が自らの力で収入を得ながら生活をしています。この数字は、本校の教育方針の妥当性を示すものであると自負しています。



平成28年度進路状況

待つだけでは求人票は来ない

ひのくにには実業系の高校のように待っているだけで求人票が来ることはありません。「ゼロ」です。共生社会が広がりを見せる一方で、企業の目は依然とシビアなのです。

そこで、本校では4人の専任職員を置いて進路指導に当たっています。中でも、民間企業で営業経験のあるキャリアサポーターを配置し、新規の企業開拓や継続訪問を行っています。年間300社・1000回を超える訪問実績があり、就職率向上の原動力になっています。

卒業生がつなぐ

さて、ここで一つ目の「つなぐ」です。

企業訪問をしていると企業主からこんな言葉をよく聞きました。「高校の先生は就職のお願いには来るが、就職させたら全然来ん」。この言葉を聞いた当時の職員は、卒業後の支援の必要性を実感し、加配措置でアフターケア担当者を置いていただくようになりました。これは、1期生を出した平成16年度から続く、本校独特の職員配置です。

このアフターケア担当者の訪問は、採用してくれた企業に対する感謝の気持ちを示すものであり、就職した生徒への支援が目的でしたが、そこには思わぬ副産物がありました。それは、「おたくの生徒は実によく働く。他に良い子おらんね？」という企業主の言葉でした。そうです。アフターケアは「求人開拓」にもなるのです。そして、企業主からこういう言葉をいただくには、そこで働く卒業生が頑張っていることが前提なのです。つまり、卒業生の自立は在校生の自立へとつながっているのです。

この流れは、進路学習として在校生に伝えていきます。今年度は、「先輩の話を知ろう」と題して、就職して2年目の卒業生と対談形式での学習を行いました。「在学中は課題だった部分が今は



強みになっている。」という先輩の言葉に、「自分の課題と向き合い、努力して克服していこう」と誓う在校生の姿がありました。また、「会社に迷惑をかけたら、それは君たち(在校生)にも迷惑をかけることになる。先輩としてそういうことがないようにしたい」という言葉に母校愛とプライドを感じる事ができました。

このように、アフターケアという本校独自の支援体制が、卒業生と在校生をつなぐ力となっています。

杉養蜂園で働く卒業生との対談

先輩がつなぐ

二つ目の「つなぐ」です。

現場実習が終わると、下級生を対象に現場実習報告会を行っています。昨年度から報告スタイルを見直し、業種ごとにブースを設け、先輩の説明の後、後輩が質問をするという形式を取るようになりました。この形式にした理由は、いくつかあります。

ひとつは、選択する力を養えることです。実習に行くためには、自分がどういう仕事をしたいのかを明確にする必要があります。業種に分かれたブースを回り話を聞くことは、実習先を自分で考え選ぶことにつながります。自己選択・自己決定は社会自立のための必須要件です。この形式は職業自立のみならず社会自立に向けた学習形態であると考えます。

そしてもう一つの理由が、先輩と後輩が直接やり取りできるところにあります。先輩は後輩に業種の特性や、体験談を語ります。うまくいったことや叱られたことを語ります。そうするうちに、自然と後輩の進路を気にかけるようになっていくのです。また、後輩からは「実習で頑張らないと、実習先をつぶしてしまう」という言葉もチラホラ聞こえるようになってきました。後輩も次に続く後輩のことをおぼろげながら考えるようになっていくのです。ここにふたつ目の「つなぐ」、「先輩が後輩につなぐ」が生まれ、卒業後も助け合う良好な人間関係が出来上がっていくのです。また、自分以外の人のために頑張ろうとする心をはぐくむことにもなり、自分の存在価値を見出し、自己肯定感・有用感を高めることにもつながっています。

ちなみに、このブース形式で生徒と企業をつなぐ「**企業向け学校公開**」を11月9日(木)に行います。生徒たちは企業の方とのやり取りをとおして、自己選択能力やコミュニケーション能力を身に付けていきます。関心のあられる方は、是非一報ください！



実習のことを笑顔で伝える先輩

社会とつなぐ

最後の「つなぐ」です。

本校で学習を重ね、就職していく生徒たち。彼らの自立は、彼らが社会とつながったことを意味します。しかし、「ひの高生」が就職するということは単にそれだけの意味ではありません。それは、地域に障がい者雇用のモデルを提供し、他校の生徒達の進路へと「つなぐ」ことになるからです。

前述したとおり、障がいのある人の就職にはまだまだ厳しいものがあります。しかしそれに屈することなく就職者を出していくことだけが、障がいのある人に対する見方を変えていく力となるはずです。それはつまり、本校に来たくても来ることができなかった生徒達の進路を切り開くことにつながるのです。我々は、ひの高生の進路を保障するだけではなく、全県に障がい者雇用を広める義務があることを肝に銘じながら、教育活動を展開していきたいと思えます。



がんばれ！ ひの高生！